

α

最近、わたしは同じ夢を見る。

巻き貝のようにねじれたビルや電柱、ぐにゃぐにゃ曲がったアスファルトの道路。満面の嗤みを浮かべたブリキの月が照らす、筆洗いのバケツを引つ繰り返したような極彩色の空。其処此所に昭和の頃にあつたような古いオモチャが散らばっていて、それらは例外なく何処かしらが壊れていた。

遠くに聳える山々は、基盤が剥き出しの電子部品。河に流れるサイケ調の水は、どこかの店のいかかわしい広告。飛び跳ねた魚が折れたギターだと気付くのに、わたしは僅かばかりの時間を消費した。

——そんな、ぐちゃぐちゃな世界の夢。

そこに、わたしが一人。ぐちゃぐちゃの世界に、たった一人。

世界はとづくに滅びていて、わたしが生き残った——なんて、奇妙な錯覚さえしてしま
う。

きつとここは、終点。

何処にも続かない世界。

一つの物語が、終わる場所。

とおoryんせ

とおoryんせ

此所は何処の細道じゃ

何処かの壊れたスピーカーから聞こえてくる、童女が唄う掠れ掠れの童唄。

天神様の細道じゃ

ちよつと通して下しやんせ

御用のないもの通しやせぬ

……この曲は知っている。

ずっと昔、祖母がわたしに唄ってくれた童唄。

寝付きが悪いわたしの側で、穏やかに唄ってくれた童唄。

場違いな懐かしい唄に、わたしは思わず顔をほころばせる。一体何処から流れているのだろう。わたしは音のする方へ、ふらふら歩き出した。

唄は近くの信号機から流れていた。そういえば、祖母の家の近くの横断歩道も、信号が青の間ずっとこの曲が流れていた——そんな事を思い出しながら。

赤信号のまま止まった、錆びた信号機。向かい合ってスピーカーから唄が流れる様は、まるで双子の姉妹が唄うよう。

——どうして、こんなところに来てしまったのだろう。

ふと、我に返って考える。

いつものことだ。いつも気がつくとき、考えている。

けれど結局、わたしが答えに辿り着くことはない。考えるだけで、終わってしまう。

行きはよいよい

帰りはこわい

こわいながらも

とおريانせ

とおريانせ

唄ってる時も、今こうして唄が終わっても、信号機は赤のままだった。わたしは不思議に思
って、信号機に近づいてみる。いつもはぼんやり眺めていただけだったけれど、今日は特別。
たまには違うこともしてみたい。

二つの信号機に挟まれた、横断歩道。ぐにやぐにやに曲がった標識が多い中、その横断歩道
だけは定規で測ったように真っ直ぐな白いラインで描かれている。

そもそもなんで、こんな場所に信号機と横断歩道があるのだろうか。どちらも、交通を管理
する為に存在するもの。秩序を守るもの。ぐちゃぐちゃの世界に、こんなものはいらない。

しかし、気になる。この横断歩道の先が。この先は一体――

とおりゃんせ

とおりゃんせ

此所は何処の細道じゃ

わたしが横断歩道に足をかけた途端、双子の信号機は唄い出した。

天神様の細道じゃ

ちよつと通して下しゃんせ

御用ないもの通しやせぬ

さつきとは違う、無機質な声。掠れ掠れではなく、はっきりと。唄に合わせ、双子の信号機は交互に赤く点滅を繰り返す。

この子の七つのお祝いに

御礼を納めに参ります

無機質な声からは、透明な威圧感がひしひしと伝わってくる。先程顔をほころばせた懐かしさは消え失せ、見れば周りの景色までもが真っ赤に染まり、こちらをじっと見渡していた。

巻き貝のようなビルや電柱はわたしの方に体を曲げ、

極彩色の空に浮かぶブリキの月は鋭い眼光でわたしを見下ろし、

壊れたブリキのオモチャ達は一斉に立ち上がり、

じりじりとわたしの方へ迫ってくる。

一歩わたしが後ずさると、一歩ブリキのオモチャ達は動き出す。

ぎこちない歯車の音を軋ませながら。

行きはよいよい

帰りはこわい

こわいながらも

とおりゃんせ

とおりゃんせ

迫りながら、唄い出す。

とおりゃんせ、とおりゃんせ、と。

此所は何処の細道じゃ、と。

唄いながら、じりじり迫ってくる。

ゆっくりゆっくりと。ゼンマイ仕掛けの人形のように。

口々に、唄い出す。

時折、無邪気に笑いながら。

時折、無垢にはしやぎながら。

此所が一体どんな場所か、

此所が一体何処なのか、

わたしは何故ここにいるのか、

それをわたしに伝えるように、唄いながら迫ってくる。

——わたしはきつと、帰れない。

漠然とした恐怖に駆られる。囚われる。

二度と帰れないんだと、わたしは声を上げて泣いた。

一、『エンドロールが流れた後』

1

出鱈目な街。

ガラクタを敷き詰めて、餡細工あめざいくみたいになねじ曲げた世界。

昼夜を問わずに世界を朱く照らすブリキの三日月が嘲笑するように見下ろし、サルバドル・ダリが描いたような道路標示が邪笑する。

観客はブリキのロボットとセルロイドの少女だけ――

「……とか、なかなか詩的じゃないか」

こんな状況で、そんな言葉が浮かんで来るなんて。これならとっとと大学やめて、小説家にならばいい。

「極限の状態ではどんな人間でも詩人を気取る——だったか。ええと、誰の言葉だったっけ……」

レバーを握りしめながら、僕はしばし思案する。しかしいくら頭をひねったって、具体的な人物名は浮かんでこなかった。やつぱり、両手が塞がっているとあまり考えられない。

「つかさ、三対一つて卑怯だよな……。こっちは独りだつてのに。まあ、余裕だけれど。どうせ三下の雑魚だ」

刹那。

ダリの道路を踏み潰し、ぬるりと右サイドから迫る腕。その手は人間のそれではなく、どこかイソギンチャクを連想させて気持ち悪い。

「ただの殴り合い——じゃあ、ねえよな。それなら、あんな触手みたいな手をしているワケないもんな……」

迫る触手を旋回しながら避け、僕は呟く。正面に見据えたそいつは、例えるなら蟹の体にハサミがイソギンチャク。こんな存在、どここの凶鑑を探したって見つからないだろう。

「交通事故……だよな、ホント。しかし三体の能力が全然分からないのに加えて、残り二体はさつきから姿を現さない。情報が不足しすぎて。圧倒的に不利……いや、攻撃力では勝っている——有利……か」

眩き、機体を加速させる。全身から放たれる蒸気音。人間の耐久限界ギリギリの速度に体が軋み、全身がシートに沈む。モニターに映る世界を冷や麦のように歪めさせながら、蟹へと肉薄した。

あのイソギンチャクに高い攻撃力も防御力も望めない。もつとも防御力なんてものは、僕にとって無関係な物なだけけれど。

レバーを操作し、スルトの背部に搭載された剣を引き抜く。黒曜石のようなつるりとした光沢を放つ、漆黒の剣。この機体が大体四メートル弱だということにも拘わらず、剣の長さは優に三メートルを超えていた。

そんな大剣を構え、化け蟹へと迫る。低空で加速する様はローラーブレードで走るよう。もう何年も遊んだことがないのに、こんな時に限って思い出す。

「運が悪かったな……お前。僕なんかと出会わなければよかったのに。交通事故だよ、ホント」

丁度近くには歩行者用信号機も横断歩道もある。この滅茶苦茶な世界で、唯一まともな形の存在。これで僕がトラックなら、本当に交通事故なのに。しかし残念ながら僕はトラックじゃないし、そもそもアレは信号機ではない。

「——じゃあ、まあ、なんていうかさ……ええと、」

大剣を振りかざし、僕は言う。

ア、イツなら何て言うか、考えながら。

[Long good - bye]

大蟹へと振り下ろされた大剣は蒸気を噴出しながら、黒い軌跡を描き一閃、胴体へと迫る。

どんな力で防御しようが無意味、無駄。マフラーから噴き出す蒸気によって装甲は劣化し、護るべき楯はガラクタへと変わるのだから。

が。

「受け止めた——だ?! いや……違う——」

見ると、先程まで姿を消していたもう一体の巨人が、己の体を楯に身を挺して大蟹を護っていた。

「あんな蟹護って、一体何になるって言うんだ。まさか、あれがああ蟹の能力? 随伴機……」

じゃないよな、明らかに形が違う」

僕の一撃を受け劣化した水晶の巨人は、美術館に展示されていそうな石像を連想させる。とても蟹とは似ても似つかない。

「だとしたら、このデカブツが防御を専門にしている機体ってことか? それならば説明が付く。しかし、あの蟹を護る理由は何だ? そもそも、あのイソギンチャクのような両腕

瞬間。

左サイドから叩き付けられる一撃。石像を斬り捨て、体勢を整える。見ると、甲虫の頭を熊の体に付けたような奇妙な巨人がこちらへ向けて、棍棒を振り上げていた。

「蟹は囧か——」

吐き出すように呟き、僕は太剣を構え直す。あの二つは囧。蟹でおびき寄せ、石像で時間を稼ぎ、熊で止めを刺す。見事な連携プレーだ。しかし、あの三機の中で一番攻撃力に特化しているのは、あのゲテモノ熊だけ。ならば、あの機体を破壊してしまえば、残り二機は必然的に沈黙を余儀なくされるだろう。こちらにもまだ、勝機はある。

熊は甲虫の口を剥き出しに、咆哮を上げた。その口は本来甲虫が持つブラシ状の口ではなく、魑魅魍魎を連想させる不揃いな顎。熊が咆哮を上げる度、口腔までびっしりと生えている小さな歯が不規則に蠢いて気色悪い。

こちらもレバーを操作し、中段の構えから太剣を八双へと構え直す。それは突きの動作。剣山を連想させる毛皮に被われた化け熊ではあるが、この剣が貫けぬ道理はない。

「くたばれ、ゲテモノ——」

僕の呟きと共に、放たれる蒸気音。ダリの道路を蹴り飛ばし、一足飛びで熊へと躍り掛かる。

鈍重な化け熊ではこちらの動きを捕らえるどころか、行動を予測することすら難しいだろう。事実、化け熊はこちらの攻撃を迎え撃つべく、無骨な棍棒を構えていた。

「さっきの石像の末路を見ていなかったのか？ そんな棍棒ごときで、こっちの攻撃を防ぐ事など——」

刹那。

背後から射撃。間髪入れず、マシンガンのように放たれる。

「まさかあのイソギンチャク……あの触手は射撃用——援護射撃だと……生意気な」
ペダルを踏み換え空中で機体を旋回させ、背後を見やる。

そこには下半身だけとなった石像の姿——

「己の体を碎いて攻撃する……それがあの石像の能力か。じゃあ、蟹は——」

見れば、化け蟹は信号機へと自分の身体を移動させていた。両腕のイソギンチャクを信号機に絡ませ、残った足をしきりに横断歩道へ伸ばしている。

「あいつ……自分から境界を踏み越えるなんて——まさか!？」

蟹の行動の意味を理解した刹那、背後から鋭い一撃。振り向かなくても分かる。化け熊がちらへあの棍棒を叩き込んだのだ。

だが、今はあんな雑魚に構っていられない。僕はペダルを踏み砕く程押し込み、化け蟹の方

へと向かった。

「あの蟹——境界を越える気だ！ あの蟹が囷なんじゃない。さっきの二機が囷だった!! 奴らはあの蟹を護るべく、動いていたんだ。石像が蟹を護った時に気付くべきだった。何故、蟹を護ろうとしたのか、きちんと考えておくべきだった!!」

——だから君は……詰めが甘い。

意地悪く笑う彼女の幻影を振り払い、僕は剣を蟹へと向けた。蟹はイソギンチャクの腕から細い触手を何本も引き出し、それを信号機や横断歩道へ突き刺している。おそらく、ハッキング。赤のままの信号機を青にする気だ。

「囷内の存在が、現実世界に行けるわけないだろう!!」

叫び、大剣を蟹へと振り下ろす。が、もはや片足だけとなった石像に再びそれを阻まれ、背後からは棍棒の一撃が這入る。

「あくまでも邪魔する気か、お前らア——」

右手で石像を碎き、残った左手だけで大剣を振るう。石像は砕かれても尚、細かい石つぶてとなって、周囲の光を反射させながらこちらへ攻撃を見舞ってくる。キラキラ、キラキラ。片

腕だけで振るった大剣は大したダメージを与えられず、化け熊の剣山みたいな表皮に小さな錆さびを作っただけだった。

とおりゃんせ

とおりゃんせ

此所は何処の細道じゃ

信号機のスピーカーから聞こえてくる警告音。擦れ擦れに聞こえる童歌は、蟹が触手を操作する度に大きくなっていく。

天神様の細道じゃ

ちよつと通して下しやんせ

御用のないもの通しやせぬ

この子の七つのお祝いに

御札を納めに参ります

チカチカと点滅を始める信号機。この世界のように真つ赤だった信号が、点滅を繰り返して青に変わろうとしている。止めなければならぬ。あんなこと、二度と起こす訳にはいかない

「させるかアッ!!」

ペダルを踏み込み、化け熊を引き離す。どんなに力があるとも、スピードでこちらに敵うはずはない。一刻も早く、あの蟹を殺さないと。信号機が青になってからでは、遅いんだ。

左手に握った剣を両手に握り直す。紅蓮ぐれんの陽炎ひかりろうが剣身全体にゆらぎ、うっすらと淡い輝きを放った。

「今度こそ……今度こそ、ケリを付けてやる。全身全霊で叩き斬ってやるから、覚悟しやがれエッ!!」

振り上げた大剣を大蟹へと叩き付ける。錆び付き、地面へと叩き付けられるイソギンチャクの左腕。まだ後一本。左腕が破壊されたというのに、未だに諦めず、触手をくねらせ信号機へハッキングを試みる大蟹。

「随分と余裕だなア——お前エ……!!」

残った右手を斬り払うべく、再び剣を振りかざし蟹へと放つ。
しかし。

「またお前か……邪魔アすんじゃねえ——!!」

がつしりと腕を掴む化け熊。甲虫のツノをこちらへ向け、身を挺して蟹を庇う。それを振り払い、僕は甲虫頭に大剣の一撃を見舞った。体勢が崩れ、ぐらりと倒れ伏す化け熊の切れ間から覗く影。

それは紛れもない人の姿だった。僕と同じようにコックピットに座り、レバーを握り締める男。ただ普通の人間と違うのは瞳の色。黒でも青でも赤でも緑でもなく、アナログ時計のような瞳。短針長針が刻印された双眸を憎悪に滾らせ、こちらを見上げている。

「なんだ……そんな顔——」

時計眼の男は動く度に崩れる化け熊を立たせ、棍棒を構えた。何が何でも蟹を守り通す——そんな、怨念めいた意思さえ感じさせる構え。

分かっている。

解っている。

判っている。

本当は、理解している。彼らの怒りには正当な理由がある。僕らを憎んでもいい資格がある。けれど。

「それを認めるわけには——いかねえんだよ」

認めれば、僕らの正当性が消えてしまう。

それだけは——何としてでも、避けなければならない。

「僕は人間で……お前らは、化け物——それ以上でも、それ以下でもない。つまりはそういうことだ………！」

迫る化け熊へ向けて大剣を構える。今は大蟹のことは後回しだ。左腕を斬り落とした為、ハッキングのペースも落ちてきている。一撃で屠れば、奴を仕留める時間は十分すぎる程ある。

大丈夫。大丈夫だ。

向こうの棍棒を振り上げるよりも疾く、再び陽炎を纏った剣身を熊へと穿つ。胸部に叩き込まれた鋼鉄の楔は中にいる男さえ原形留めず劣化させ、砂へと変えた。

「残ったのはお前だけだな——蟹野郎」

砂を払い、切っ先を蟹へと向ける。残された右腕を信号機に絡ませ、奇怪に蠢く大蟹は事の重要さをさほど理解していないのか、未だハッキングをやめない。

諦観しているのか、それとも——

斬、と響く風。

「なんで——」

眼前に聳えるは、巨大な鎧武者。手にした刀の切っ先をこちらに向け、蟹を護るべく立ち塞がる。

「機械的な形……BAGSじゃ——ない。……こいつは、アガシオン——僕のスルトと同じ、アガシオン。そいつがああ蟹を護ったということは、人間が時計眼の連中の味方に——付いているという事か……？」

有り得ない。そんなことが、あつていい訳がない。

いや——

「居たな……そういえば、一人——そういう裏切り者が……」

奥歯を噛み潰し、僕は呟く。

「——お前……水嶋望の一派か？」

鎧武者は答えない。代わりに己が刀を下段に構え、一足飛びで間合いへ這入る。

「っ——」

その一撃を大剣で受け止め、弾き返した。だが、鎧武者は巻き貝のような建造物を足場に跳躍し、こちらへと迫る。回避し、一撃を見舞うべく大剣を振るうが、それよりも早く鎧武者の一撃が肩を斬り裂いた。

警報。

ダメージを伝える幾つもの赤い表示が、網膜へと流れ込んでくる。それを押し退け、僕は機体を加速させ、鎧武者の背後へと迫った。

しかし。

「分身!？」

追っていた鎧武者の姿が、三つに増えていた。

「幻覚——惑乱させる気か、小賢しい……!」

幻を振り払うべく、剣を振るう。しかし鎧武者の幻影は決して消えない。

『——お前の能力は、自身の剣で触れた存在を経年劣化させる』だったな』

「!？」

突如、無数の鎧武者から一斉に響く搭乗者の声。

『機体を劣化させ切断する——お前の機体の機動力と合わされば、接近戦では無双。いかに堅牢な装甲を身に纏おうとも、お前の機体の前では無力。もつとも、接近戦では、の話だが』

「……………」

見抜かれて……いる。こちらの能力を。こっちはまだ、相手の能力を把握していないというのに。

『斬る対象者がいなければ……その能力は、効果を発揮しない——』
刹那。

一斉に斬り掛かる鎧武者の幻影。剣で振り払おうにも、霞を斬り裂くかの如く手応えがなく、空振りした。

水面に反射して輝く光のように、キラキラさせながら果てていく幻影。

『無様だな、光宮鶉。先程の威勢はどうした？ 余裕はどうした？ 所詮お前は抜き身の剣。剣を握る主を失えば、ただのガラクタに過ぎない。早々に圏内から——去ぬがいい』

「言ってくれんじゃん——」

ペダルを踏みつぶし、反転。そのまま加速。鎧武者を避け、化け蟹の方へと——

『逃がすわけが——無かろう』

「っ——」

立ちはだかる、鎧武者。

「こいつ……スルトの加速に付いてきたというのか!？」

再び眼前に現れた鎧武者に侮蔑を込めた一瞥をくれながら、奥歯を砕くように噛みしめる。

『……我らの野望、お前ごときに打破される訳にはいかぬ』

「圏内の存在が境界を越えれば……どうなるか、知っているんだろ!？」

『己を構成する存在が崩壊し、消失する……だったか』

「だったら、何故——」

『我が暴君は、こう仰せられた。〃何万回何億回と同じ事を繰り返せば、一つぐらい成功するだろ。既に一回、成功例もあることだし〃と……な』

「なっ——」

言つて、鎧武者は視線を化け蟹へと移した。

信号は青に変わっている。こ、つちとあ、つちを結ぶ扉が開いたのだ。化け蟹は突き刺した触手をすると収納し、ガシャガシャと無数の足を蠢かせ信号機から降りると、横断歩道を目指した。

信号は青。遮るモノは何もない。化け蟹は躊躇無く足を蠢かせ横断歩道を渡っていく。

渡つて、渡りきる前に——自身の体が崩壊した。

『……ふむ、どうやら失敗だったようだな』

砂のように崩れ落ちる様を見ながら、鎧武者の搭乗者はさほど関心した様子もなく淡々と言葉を紡ぐ。

『さて、どうするかね？ こちらの目的は失敗した。些か興醒めではあるが、私は帰らせてもらうよ。これでも大学四年だね。帰つて——就活をしなければならぬんだ』

「お前……この状況で、帰れると思っっているのかよ」

『帰れるさ。なんなら——阻止してみるか？』

「言われなくても……無傷では——帰さない」

剣を構え、鎧武者へ迫る。しかし、眼前にいた鎧武者さえも幻影。剣は虚空を斬り裂き、道路標示を叩き割った。

『無駄だ。剣を交えるだけしか能のない貴様の機体では、私の句句^{くぐのち}迺^{のち}馳^ちには傷一つ付けられんよ』

どこからか響く、男の声。

『正直、期待外れだ。やれ女傑^{じょけつ}やら魔女^{まじ}と畏^{おそ}れた、あの嘯^{うそぶ}樹^き水面^{みなも}が仕切るワルガキ団最強の騎士がこのザマとは。それでも私はお前に敬意を表していたのだよ？ あの大战時、無量大数に等しいBAGsを相手に、たった一振りの大剣だけで立ち回った姿は実に雄壮で神々しかった。なのに今のお前は何だ？ 無節操に圈内を荒らし回り、BAGs狩りを続けているお前には何の魅力も感じない。……もつとも、ある意味、魅力など最初からなかったも同じだが。何しろ君はあの大戦の最後——』

「BAGsに——あの時計眼の連中に協力するお前に、言われたくねえ!!」
背後から迫る鎧武者を斬り裂いた。幻影。空振り。ゆらりと幻影が揺らぎ、霧消する。

『時計眼の連中……か。化け物のような言い草だな』

「化け物じゃないか！ 僕らは襲ってくる奴らを狩る為にアガシオンで——」

『違うだろう、光宮鶴』

否定。

『彼らは圏内の住人だ。元々、ここに住んでいた存在だ。彼らは自身の独立を勝ち取る為、戦っていたに過ぎない。彼らの安住の地を侵略し、彼らを蹂躪したのは——我々の方だ。』

『もつとも、そんなことはどうでもいい。私は別に彼らの側に付いた訳ではないのでね。実際、あの時計のような目は気味が悪く、不快だ。視界に入るだけで、腹が立つ。彼らの側に付こうとなんて、私が思う訳がない』

「じゃあ、なんで——」

『決まっているだろう？ 我が暴君、水嶋望の為さ』

「やっぱりお前は奴の——」

『暴君は現在、一年前のワルガキ団ナツドサットと似た結社を組織している。もつとも一年前と違い、能力が優れていれば、目の形なんて関係なく加入することが可能だ。自由を勝ち取る為に作った正義の組織が、その大将を殺した悪の組織よりも自由がないとは……何とも皮肉な話じゃない

か』

くぐもった嗤い。

『さて、お話はこれでおしまいだ。いい加減、私は帰るよ。今日は後二社、面接に行かなければならないんだ。本当に不景気は困るな……なんとかして欲しいものだ』

「っ……………」

帰らせるわけには、いかない。何としても、あの鎧武者を倒して、奴の——水嶋望の居場所を吐かせなくては…………！

だが奴を捉^とえる事が出来ない上に、あの鎧武者に傷一つ付けることさえも出来ない。幻に何度剣を振るつたところで、幻影が霧散するだけだ。本体には一切ダメージが届かない。

こんな時——あいつが、嘯樹がいてくれたら…………

——君は本当に…………詰めが甘いね。

「分かってるよ……………こんちくしょう」

もう、いない。

嘯樹は、もういない。

ああ、クソ。考えがまとまらない。片手が空いていないと、駄目だ。平らな所じゃないと、考えられない。考えたことが、まとまらない。

——面白いクセだね、ソレ。なんだか、キーボードを打鍵だけんしているみたいだ。

「人のクセを発見してからかいやがって……まったく——」

ボードがないなら。

平らな所がないなら。

作るしか——ないだろうが。

「……………」

僕は左手をレバーから外し、ジョーンズから展開したままの携帯を引っ張り出した。表面はデコボコだが、裏にすれば平らになる。小指と親指で携帯を掴み、残った三本の指で携帯のボディをリズミカルに打鍵した。

まずは現在の状況の整理。

鎧武者と戦闘。鎧武者はBAGsパグスではなく、アガシオン——人間が乗っている。能力は幻影を使った分身。

三本指で携帯を弾き、僕は思考する。

最初に交戦したBAGsは三体。化け蟹と化け熊、そして水晶の石像。石像を真つ先に倒し、次は化け熊。残った蟹は境界を越えようとして消失。

実質、一対一。不利な状況ではあるが、勝機はまだある——筈だ。

「……そういえば、あのBAGs達の能力は何だったっけ」

蟹は信号機へのハッキング。熊は能力を判別する前に破壊。石像は砕けた自分の身体を使って攻撃……だったか。

「それにアガシオンが一体。能力は幻影を使って分身し相手を攪乱……攪乱、だけか」
今のところは。

先程からこつちを攪乱するだけで、ダメージをまったく与えていない。

出来ないのか、しないのか、いや、そもそも——

「……おかしい」

BAGs三体にアガシオン一体の編成。その中でアガシオンだけが浮いている。蟹はハッキング、石像は射撃、熊は打撃力。他の三体は連携していたのに、アガシオンだけはその連携の枠に入っていない。熊と同じく打撃力と考えられなくもないが、それでは上手く説明出来ない。BAGs三体の編成の方が、明らかに効率が良い。お互いをお互いで補える。アガシオンが、

あの鎧武者が邪魔なのだ。今のままでは。

「あの三体編成は元から存在していて、それにアガシオンを加えたって事も考えられるが……普通はそうなんだが、どうも引っ掛かる……大体、」

——何で、アイツは帰らないのか？

圏内の存在ならともかく、僕らのような外の人間であれば、携帯の右の電源ボタンを押せば勝手に圏内から出ることが出来る。なのに、アイツはそれをしようとしなない。ここから導き出される結論はただ一つ、アイツは僕から離脱したいが圏内から出る気はない、ということ。

あの鎧武者の搭乗者は、まだ、何かをやらかす気だ。

「後手後手に回り続けてたまるか……一矢どころか十矢報むかいなければ、採算取れない」
呟き、僕はキラキラさせるだけで手応えのない幻影の鎧武者を斬り裂いた。

「憎らしい程綺麗だな……コレ」

光を乱反射させ果てていく幻影を横目に、軽く舌打ち。

季節外れの雪のよう。キラキラ光って、本当に綺麗。

キラキラ、キラキラ。

キラキラ——光って？

「さっきからずっと——おかしいと思っていたんだよな……」

携帯から、手を放す。

笑いを噛み殺しながら、僕はモニター越しの鎧武者達に突っ込むべくペダルを踏みつぶした。

——なあ、嘯樹。

お前が居なくても、案外僕はやれそうだぜ？

(続く)